

日本のミズべ、といったらFUKUI。 FUKUIを、世界に名が轟く リバービジネスの故郷にする！



■「おしゃれなり・BAR」におけるリバー ビジネス創出の構想をお聞かせください。

「川人」と書いて「かわど」と読みます。この地域には川をなりわいにしている川人が昔はたくさんいたんです。それで、若い人をターゲットになにかやるんだとしたら、新しいリバービジネスというもあるんじゃないかな、と思ったんですよ。

というのも実は、「おしゃれなり・BAR」の根底にあるのは「少子化&定住化対策」という大きな目標なんです。リバービジネスはその大きなフレームの中の一部です。私のひとつのゴールは、「このミズべでカフェを開く。それならここに棲んでみよう。ここで結婚して子どもも育てたいな。よし、やってみる！」そんな人が1人でも現れたとき。大自然の川の中で、子どもたちがなにも考えずに遊ぶ。そんな景観を創出していきたいんです。

■ 運営のポイントを教えてください。

出店には、ただ営業で利益を上げたいというわけではなく、川に着眼点を置く方に限っていますね。経営者の方々には実店舗とは少し目線を変えながら経営していただいて、普段は来ない顧客層を獲得してもらいたい。基本的にビジネスなのでプロのおもてなしをご提供していますし、入場料を設定することで来る方のポテンシャルも上げています。重要なのは、補助金・助成金を投入しないこと。そうすることで出店側も営業努力をしますし、プロの提供するサービスに舌鼓を打ってもらうことで、この空間自体のクオリティも上げています。

だからといって、行政が関係していないかと言えばそうでなくて。このイベントに必要な巨大テントを留めるためには、大きなアンカー（杭）がいります。それをイベントの開催用だけでなく地域の防災対策として、有事の際の拠点となる防災基地にも役立てられるような常設のものにしてはどうかと提案したところ、市役所発注の工事として完成することができました。こういった、行政だけにしかできない支援もあります。民間と行政、お互いができるベストを尽くすことで、地域をよりよくしていく。それが大事なのだと実感しています。

■ 日野川流域の未来を、どう描いていますか？

日野川の一連の取り組みを国交省、県、市役所が応援してくれていることで、流域市民の意識も上がってきています。こんなにポテンシャルが高い地区は、なかなかないんじゃないかな。私は新しいリバービジネスを、ここ福井県日野川を発祥として広めたい。と大きいことを言っているんですけど（笑）外国人に「Do you know Japan?」と質問したとき、「Yes! KYOTO, TOKYO, FUKUI!」って言わせたいんですよ。たとえばスキーだったらNISEKOが出てくるように「日本のミズべといったらFUKUI!」だと返ってくる。そんな野望を抱きながら、これまでにない新しいリバービジネスの創出を手掛けていきたいですね。



■ 3日間に渡って開催された昼・夜のイベント。
2015年は外国人のお客様も多く参加いただきました。





雲南市産業振興部商工観光課副主幹の肩書きを持ち、観光PRに従事。雲南市・奥出雲町・飯南町と3市町合同の観光誘致プロジェクト「おくいずも女子旅つくる！委員会」の運営にも携わる。

おくいずも女子旅つくる！委員会が発行する“女子目線”だからこそ発見できる、「おくいずも地方」の新たな魅力を発信するフリーペーパー「Okutabi」は3万部を超える。

女子パワー発信者 鈴木佑里子



■「おくいずも女子旅つくる！委員会」とはどのような団体なのですか？

雲南市と奥出雲町、飯南町の3市町がまたがる「おくいずも地方」をPRするための団体です。委員会のメンバーは3市町の商工会やJA、行政の女性職員10名です。“女子目線”という今までになかった角度からおくいずも地方の魅力を掘り下げ、旅の楽しみ方を提案する情報誌「Okutabi(オクタビ)」を発行しています。また、おくいずも地方を堪能するさまざまなワークショップやイベントなどの体験プログラムを1か月間かけて開催した「Okutabi むふふサマー」や、おくいずも地方を旅する女性28人に焦点をあてて制作したインタビュームービーコンテンツ「彼女たちが旅に出る理由」の発信など、「Okutabi」と連動した多岐に渡る企画も運営しています。

■「おくいずも女子旅つくる！委員会」が発足した経緯をお聞かせください。

2013年3月に山陰と山陽を結ぶ「中国横断自動車道尾道松江線」が開通しました。広島県の尾道から島根県の松江をつなぐ経路で、今までにくかった山陽方面の人が流入してくると見込まれました。この道路の中の無料区間終着点というのが、雲南市の中心部にあるインターチェンジなんですね。出雲大社や松江城がある出雲市や松江市は観光地としてにぎわっていますが、おくいずも地方は素通りされる不安がありました。しかし開通をチャンスに、無料区間を降りてこのおくいずもエリアで遊んで行ってもらおうと。

それで、もともとこのエリアは消防や介護保険など、ひとつの市町だと採算がとれない行政事務を3市町で連携して行う「雲南広域連合」

という組織がありました。開通を契機に3市町広域での観光を売り込んでいこうという話が持ち上がり、立ち上がったのが「おくいずも女子旅つくる！委員会」です。

■ダム見学を組み込んだツアーや川辺で踊った「100人deヒゲダンス」など、ミズベ資源をユニークに使っていますね。

ダム見学は20～30代の女性モニターが参加するツアーに組み込んでみたんですが、最初は不安がられました。そこだけ異色だ、おもしろいのか、って(笑)。このエリアには尾原ダムと志津見ダムという2つのダムがあるんですが、貴重な観光資源にもなるんですよね。近くにあったはずなのに、気づきませんでした。尾原ダム管理支所から女性がダムに来るようにPRしてほしいとお話があったのが縁で。私た

ちもダムに行ったことがなかったので、まず見学しに行ってみました。これがおもしろい！長いエレベーターを下ってダムの内部に入るとどこかの基地のような雰囲気。川の生態系を崩さないためにダム湖内で異なる温度の水をミックスして放出している話やその装置など、メンバー一同「すごい！！」と感嘆の声があがりっぱなしでした。私たちがおもしろいと思うんだから、きっとお客さんもおもしろいだろうと(笑)。するとやはり大好評で、毎回ツアーにはダム見学を組み込むようになりました。

「100人deヒゲダンス」はその時企画だったイベントのモチーフがヒゲだったので、ヒゲと言ったらヒゲダンスだろうと思いつきました(笑)。場所に関しては、おくいずもらしい場所は「願い橋」かな、ってみんなの意見が一致して。このエリアの象徴的なところなんですよ。屋台もなにもない川辺の広場でしたが、子どもから大人まで多くの方にお集まりいただきました。おくいずもエリアで何かしようとすると、気づくとミズベにいる。思いつく企画の真ん中には川がある。



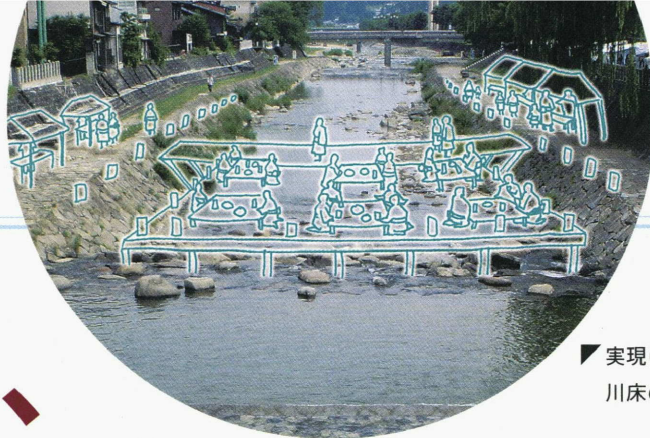
■ミズベは貴重な資源であると同時に、切っても切り離せない存在なんですね。

おくいずもエリアはヤマタノオロチ伝説のモデルとされる「斐伊川」という大きな川でつながっています。斐伊川はただの川じゃない、この地域みんなの心象風景として広がっている。流れが異なるほかの川の地域の方と話すと、特に感じますね。川の流れが一緒だからこそ昔から運ばれてくるものが一緒だったり、採れる農作物の品種が同じだったり。祭りや文化、言葉、経済圏や生活圏など、共有している感覚が近いんです。人格の形成に川が影響していそうなお話(笑)。そんなエリアにいる私たちだからこそわかる地域の魅力を掘り起こして、もっとたくさんの方にここを訪れてもらえるような情報発信をしていきたいです。



おくいずも女子旅
つくる！委員会

おくいずもに、華やかパワー炸裂！ “女子目線”が、ミズベをおもしろくする。



■実現は難しいのでは？と言われた
川床のアイデアスケッチ

飛騨高山のミズベに、 川床ブームを巻き起こせ！

■高山の川に川床をつくろうと思った 経緯を教えてください。

まず、ぼくは東京にいてサラリーマンをしてからUターンでこちらに戻ってきた人間なんです。生まれ育ちはここ高山。ずっとこのミズベで暮らしてきましたが、東京に行くまでは別に普通の川やな、と思っていました。

社会人になって東京に出て、故郷と少し離れてから帰ってきたら、ものすごくいい環境なんだな、と実感した。ミズベって、音や風の流れなんか、単純に気持ちいいですよね。こんな素敵な環境を、地元の人や観光客の方にアプローチしていきたいと思いました。

東京で働いていたときの会社の本社が京都で、訪れる機会が時々あって。そのとき「川床」というものを知って、いつかここ飛騨でも川床ができればいいよなあ、という気持ちが芽生えたんです。この地域のミズベの魅力を伝える手法として、川床という選択肢が「アリ」なのではないかと思いました。

■実際に川床が実現するに至った いきさつを教えてください。

高山市の青年会議所に所属しているんですが、今年ぼくがイベントの企画を考える委員長をやらせていただくことになりました。青年会議所は、ここ高山の「明るい豊かなまちづくり」をめざして日々活動をしている組織。高山青年会議所の役職は単年度制で、毎年役が変わっていきます。それで今年その委員長をぼくが引き受けさせていただくことになって。みんなで出資したお金で事業をしていいよ、という話になったので「いままでやりたかったことをやってみよう！」ということで、ここ高山市の宮川に初めて川床を出現させる『川床を楽しみナイト』を提案しました。

■提案に対して、周囲の反応はどうでしたか？

おもしろい、やってみよう、というよりは「ほんとにできるんか？許可が下りるんか？！」というのが正直なリアクションでしたね。青年会議所のメンバーには、建築関係に従事している方もみえ、今までの経験から、川でなにかをやることに対して許可が下りにくい、というイメージがあったようです。でもぼくは大概のことはなんとかなると思って生きている人間なので（笑）、やりたいと思ったらやればいんじゃないかと思い、行動に出ました。

■高山での川床実現に向かい、

具体的にはどのように動いたのでしょうか？

ぼくが運営しているコワーキングスペースがちょうど今回の「川床を楽しみナイト」の会場となった宮川沿いにあるんですけど、たまたま仕事の関係で知り合った方にその話をしたら「最近ミズベがアツいよね」という話になって。それでミズベリング・プロジェクトのことを知りました。すぐにミズベリング・プロジェクトのホームページの問合せフォームから、「ミ

ズベでいろいろやりたいと思っているんですけど」というメールを送ったんです。それから「飛騨高山ミズベリング会議」を開催するに至りました。青年会議所のメンバー、河川に関する許可決裁を有する方たち、河川の活動をされている方などなど。「川のご近所さん」に一堂に集まっていただき、講演会とワークショップを通じて「こんなミズベが楽しいよね」というアイデア出しを行いました。それぞれの活動や立場によって考えることもさまざまですが、「飛騨高山ミズベリング会議」をきっかけに、この街の思いがミズベに向かい、ひとつの流れができあがったのではないかと考えています。

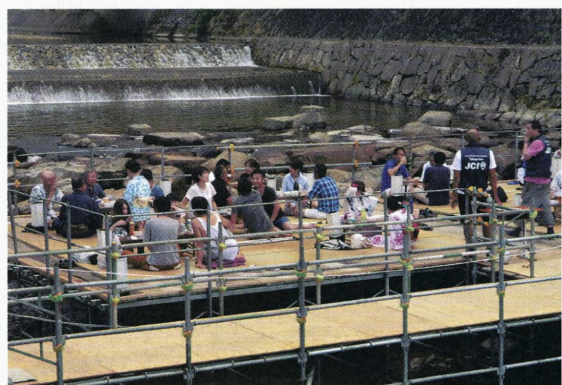
■飛騨高山のミズベに対する想い、 これからの構想を教えてください。

ここ高山のミズベの環境のすばらしさを地元

の人や観光客の方々にもっともっと感じてもらいたいです。川のせせらぎの音を聞くだけで、それが伝わると思うんです。そういった機会をどんどんつくっていききたいですね。

それと同時に、“ミズベの可能性”を感じてもらえたらいいな、と。飛騨にはまだほかにも川があります。今回ぼくたちが川床を実現したことで、別の地区でも川床をやりたい、という声がちらほら出ているようです。飛騨で川床ブームが起こるかも！（笑）

ミズベの可能性はまだまだ、広がっていくと思います。ミズベから、地域を活性化させるムーブメントをつくっていききたい。この街に、いい風を吹かせたい。もっと人が集まり、共存していく場へ。そんな未来を、ミズベでつくっていききたいと思っています。



『川床を楽しみナイト』の様子



公益社団法人高山青年会議所の2015年地域環境委員長。一度は地域を離れ東京で働いたが、世界を巡る旅を経て、飛騨高山にUターンした。自らが生まれ育ったミズベの魅力に気づき、地元をもっとおもしろく、より素敵な場所にしたいという想いを抱くようになる。

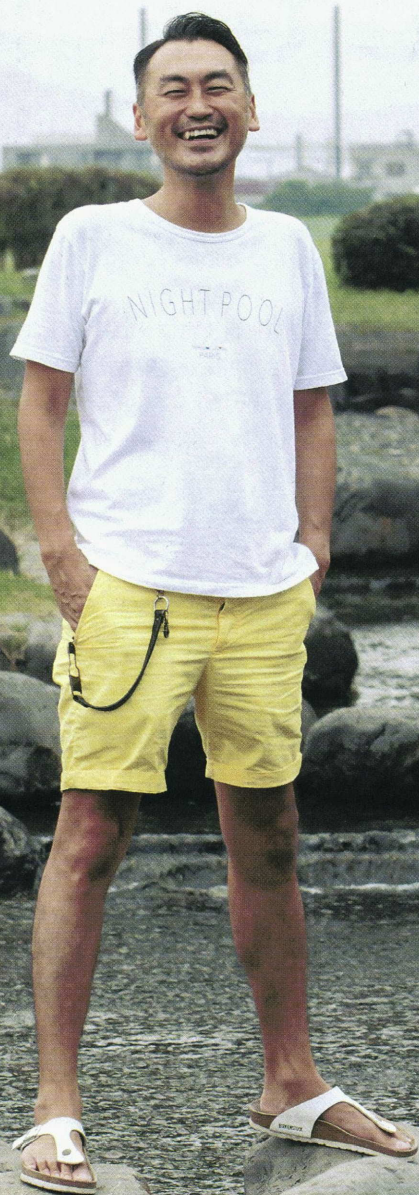
家業である高山印刷株式会社の経営とともに、飛騨高山から新しいムーブメントを創造・発信する拠点として、コワーキングスペース「co-ba hida takayama」を開設。地域のコミュニティをつなげる活動を日々行っている。



■青年会議所のメンバーと一緒に。

鎌田耕慈

ミズベ音楽セラピスト



水辺を愛し、自ら「Mizbering Music」というサイトを立ち上げた音楽／メディア・プロデューサー鎌田耕慈さん。水辺で聴きたい、水辺を感じる、おもわず水辺にいきなくなっちゃう。そんな音楽やライフスタイルを紹介してくれています。そんな「水辺ラブ♥」とは、どこから生まれてきたのか。ちょっとインタビュー！

音楽との出会いをお聞かせください。

大学の在学中からラジオ番組制作を手伝いました。兄の影響で、黒人音楽、つまりソウルミュージックから入りました。ソウルミュージックから初期のヒップホップ、RUN DMCとかに興味が行きまして。ここまで熱狂しているなら日本初のヒップホップ番組を作ろうということになってNACK 5(埼玉県79.5FM)で「Street Flava」という番組をつくったのが最初です。

ラジオ番組が好きなのは大学を休学してアメリカに住んでいた時、カーラジオばかり聞いていた影響が大きいですね。音楽のことだけを四六時中話している。あーいうスタイルの番組が好きですね。日本では小林克也さんが「ベストヒットUSA」とか、音楽だけの専門番組をやっていましたね。

アメリカから帰ってきてから「音楽やりてーな」って訳で、制作事務所で3年働いて、クラブ音楽にはまって。いまでいうフェスのようなことばかりしていました。それでDJカルチャーやクラブカルチャーに特化した番組をつくらうと思ったんですね。当時、日本には無かったから。それで「Peace」という会社を立ち上げたんです。DJカルチャーやクラブカルチャーを追求する制作会社。でも会社をつくったからには、なんでもしないと食っていけない。音楽づくり、CM、サウンドロゴなど、音に関する全てをつくる会社になった。イギリス国营放送でトップDJが毎週やっていた番組BBC Radio 1「Essential Mix」なんかもち早く輸入していましたね。外国語専門放送としてスタートしたInterFMの立ち上げに参加もしました。

仕事のし過ぎで「水辺」と出会う？

そんなこんなで仕事漬けの毎日、週10本くらいレギュラーをこなして徹夜は続け、陽の当たらないスタジオ暮らし。ちょっとカラダも精神もおかしくなってきた、気づいたら奥さんと川沿いに住み始めたんです。いや、カラダが勝手に川のせせらぎを求めていたと言っても過言ではありません(笑)。まさしく川に助けられました！風の音。水の音。夕暮れ。自然の力が僕を癒してくれた。で、その効用を知ってからは、いつも川びたり。学生時代もニコタマ、会社もニコタマ、家もニコタマに住んでいて、多摩川は僕の人生になくてはならない存在になりました。

リバーサイドにカフェをつくることになった！？

川沿いに引っ越してきた家の前に、「川の家」というかオンボロの店があって、そこでおばあちゃんがラーメンや焼きそばをつくってくれていた。河川法がない時代からあった店で、昔はそこで夕涼みしたり、魚釣りしたり、食事やお酒を楽しんでいた。昔の二子玉川エリアは、中央の偉いサンたちが黒塗リハイヤーでやってきて、川遊びを楽しみリゾートだったんですよ。

で、ここからが僕が川と向き合うきっかけになった。2002年頃、その店を経営しているおばちゃんに「お店をやらないか」と持ちかけられた。30歳のとき。で、その掘建小屋を仲間と改造して、ペンキを塗って、「カフェ Peace」をオープンさせた。オープンスペースが売りだったので、片手で食べられるピザとビールのお店。で、いきなり人気が出ちゃって、近隣の住宅とも近いこともあって「移動しろ」と勧告されて、兵庫島の向こうに引っ越し。そこで出来たのが、いまじゃ伝説のカフェになった「Peace Tokyo」なんです。僕が水や風に助けられたから、同じようにオープンでリゾートなイメージにしたかった。ここもビールやワインと軽食と、いい感じの音楽！をモットーにして、2010年の年末まで、夜な夜なDJをやっていました。



伝説のカフェ「Peace Tokyo」

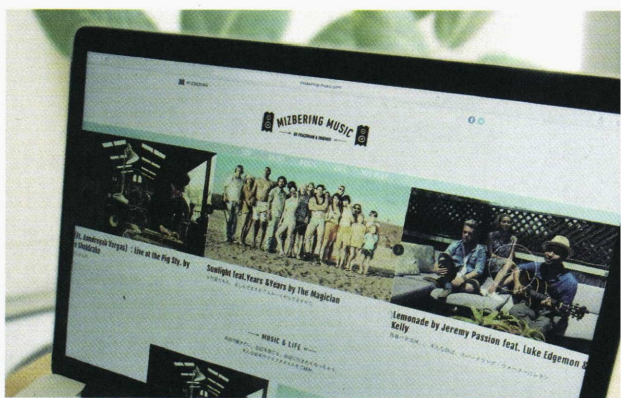
好きな水辺はどこですか？

なんといっても多摩川。サンセット時間で富士山が見えるのは最高です。海外でいえば、ギリシャのサントリーニ島。サンセットと海辺。タイのプーケットから1時間ほど上にあがったカオラックのサンセット。あ、海外は海辺が多いなあ。

水辺の大切さとは？

ミズベの大切さをもっと知ってほしいですね。自然を感じる、目に見えない波動を共有するミズベの美しさ、波の美しさ…。結果、それは「ありがとう」とか、「たのしい」とか、「うれしい」とか、人間のプリミティブな感情を感じやすくするものだと思うんです。

ミズベや音楽を通してモノやお金以外の目に見えない感動を届けていきたいですね。みなさん、ミズベリング・ミュージックをチェックしてくださいね。Here We Go!



<http://mizbering-music.com/>

風や水の音、夕陽…。

僕は、水辺に助けられた男なんです。